

# 昭和50年度

# 臨時総会 開催される

# 飯田高校同窓会報

七月十三日(日)午後一時より上郷町公民館において臨時総会が開催された。

会則による定期総会は毎年八月となつていたので、臨時総会ということである。期日変更の理由は、高松祭(七月十二日~十四日)に併せて開催することが会員の出席を良くすることだと判断し、幹事会で検討し決定されたものである。このため校内幹事が高松祭関係で多忙の時であり、初めての試みとして総会実行委員会をつくり、委員長の高坂

好忠副会長(中41)をはじめ十名の委員が選任され総会の運営に当り、結果は大変好評であった。議事項目と結果は次の通りである。  
(1)役員改選について幹事会における投票結果を参考委員長の北原名田造氏(中11)から発表があり、満場の拍手を以って承認された。その結果、本年の役員全員が再選されたことになる。  
会長 中島賢二郎(中17)  
副会長 北原 明治(中23)  
" 松下 逸雄(中37)  
" 長坂 好忠(中41)  
" 横田 盛広(高3)  
監事 外松 淳(中39)  
市瀬 泰久(高2)  
" 市瀬 泰久(高2)  
会計 原 勝一(中44)  
(2)会則の変更は要約して次の通りである。  
イ、定期総会「毎年八月一回」を「毎年一回」とした。  
この結果、本日の臨時総

### 昭和49年度飯田高校同窓会収入支出決算書

収入決算額	6,838,900円
支出決算額	3,011,423円
差引残額	3,827,477円
(内訳)	700,000円積立・3,127,477円次年度へ繰越)

<収入内訳>		<支出内訳>	
入会金	383,000	人件費	818,990
維持会費	3,714,747	事務費	49,438
繰越金	420,831	慶弔費	47,120
雑収入	69,322	会議費	220,595
名簿荷造資料	1,441,000	通信費	583,144
広告料	810,000	印刷費	489,400
合計	6,838,900	資料室	246,000
		旅費	47,020
		雑費	209,716
		積立金	300,000
		合計	3,011,423

昭和50年5月8日 会計監査 外松淳・市瀬泰久

### 昭和50年度飯田高校同窓会収入支出予算書

収入予算額	15,136,569円
支出予算額	15,136,569円
差引残額	0円

<収入内訳>		<支出内訳>	
入会金	577,500	人件費	1,365,000
繰越金	3,127,477	事務費	50,000
維持会費	2,500,000	慶弔費	58,000
名簿送料	700,000	会議費	320,000
広告料	2,200,000	通信費	880,000
雑収入	40,000	印刷費	440,000
名簿積立金	5,991,592	資料室	30,000
合計	15,136,569	旅費	70,000
		雑費	230,000
		名簿作成費	9,000,000
		荷造送料	1,800,000
		積立金	600,000
		予備金	293,569
		合計	15,136,569

会を定期総会に替えることを会長より宣言された。口、会長、副会長、監事、会計、校内幹事を一括して常任役員とし、他の役員と区別した。へ、入会金、維持会費の全額を会則から外し、会計

第10号  
発行人 飯田高等学校同窓会 長郎 広  
編集責任者 賢二  
印刷所 吉田印刷 田共同印刷 阪

細則を設けてここへ移した。24)の音頭で校歌斉唱、松沢清一氏(中9)の音頭で万才三唱と、とどこおりな懇親会に入った。  
マユミ(玄関前植込)  
(中二十五回卒業)  
(五十周年記念)



泰山木(玄関前植込)  
(中四十五回卒業)  
(三十周年記念)



講師 森谷 要氏

世界はいま大きな転換期をむかえている。戦後体制としての米ソ二極体制から多極体制への転換であり、いわゆる東西問題から南北問題への転換である。米ソ二大國支配に対し、新興諸國が生存し繁榮する權利を主張してきた事である。米ソは戦後各地でことあるごとくに抗争し緊張を創り出し軍拡を押し進めて来たが、いまや兩國とも各地域で望ましい成果を得られずついには自國の政治經濟にすら支障を来し國民の不滿をたかめ政治の不安定をひきおこしてしまった。例えば、米はベトナムで42兆円を消費し、5万数千の死者を出し、5000万人は緊張緩和による軍縮のため中ソを訪問、戦略兵器制限交渉を追求した。米ソの世界支配に不満を持つAA諸國等新興國は、既に國連の60%を占め、第一次産品である天然資源を武器に米ソ等先進國に播さぶりをかけ始めた。

を叫ぶ米、社会主義の咎として反米帝を叫ぶソ連という社会制度・思想・原理といたったような一歩も譲り得ない対立要素があったからにはあるが、具体的にこの二極構造を維持し得た要因は、何といつても核保有である。米國防省ラロック情報では、米の核戦力はソ連の10万人以上の都市を37回分も破壊し得る力を有し、ソ連も米の10万人都市を連続11回も破壊し得る核戦力だといふ。また兩國の核の殺人能力は地球上全人口を二重も殺し得る量であるといわれている。こうした超核保有國に反発する新興諸國の第三世界のリーダーとして登場するのが中国である。ここに中国を含めた三極構造へと展開する。例えば日中友好条約の調印、中東の覇権条項の主張、ソ連のアジア集團安保の主張、中国の対タイ・フィリピン・マレーシアとの国交回復、こ

# 考える

## 建設公団理事 森谷 要氏 (中41回)

れに対するソ連のインド洋からの中国包圍作戦の展開。印パ紛争のあり、ソ連のインドへのこ入れの代償としてのインドへの魚業基地はソ連の軍事基地化しており私はインド洋を我が物顔に横行するソ連大艦隊をインド洋上空から見た事があるが、まさに中ソ対立の激化をインド洋にも見たのである。さらにシベリアのチムニニ油田開発のパイプ敷設が鉄道敷設を巡る対立も中ソ軍事戦略がからまつており、日ソ共同開発計画は頓座。漁業交渉でも日中接近を警戒してかソ連は善意の売り込みを始めています。こうした三極構造は更に英仏と最近盛んに核実験をしている印、経済分野での日本ECなど軍事的經濟的にも世界史は米ソ単一支配二極体制から多極化時代へと展開して来ている。であるから各國とも基本的には緊張緩和を強く

求めているといえよう。戦後世界は四つの大問題を抱えて来た。一つは東西ドイツ分裂問題であったが、ようやく東西分離が固定化し西独は資本主義陣營の中で最も安定した經濟力を有し、東独も共産陣營の中で最も安定した地位を築いてきた。武力統一から平和的統一が課題となつて来ている。第二は中東紛争であるが、これも一応和平への具體的展開が見られるようになって来ている。第三はベトナム戦争での米の敗北により解決を見た。残る第四こそ朝鮮問題であり依然として國際緊張の焦点であり危険である。4K巾の非武装地帯が38度線で半島を横断、休戦本會議は三百六十余回も繰返され、本會議のやり取りはラウドスピーカーで板門店周辺にそのま流され、ある時には延々七時間余に亘るといわれている。私はかつて休戦會議実施中の板門店近辺を見聞する機会があったが、まさに緊張の焦点であると感じた。

この戦後体制崩壊期にあたり更に特徴的なのは各國の政治統治能力の弱体化である。米はいままでもなく、英独仏しかり、伊にいたっては半年もたない内閣の連続的交代、ソ中も指導者の老令化もからみ不安、

# 卒業30周年記念同期会

中45回 小松 晋 晟

八月十六日、飯中第四十五期卒業三十周年記念同期会が開かれた。会するもの六十四名、恩師の七名の先生方にも御出席いただき盛大な同級会であった。同級会前日の十五日、私は朝五時すぎに高知を発ち、海をわたり山を越えて夕方六時すぎ飯田到着。丁度、飯田は盆踊りの宵とのこと、街はわかい男女が行きかいにぎわっているではないか。私は、太平洋戦争開戦の年に飯中に入学し、終戦の年に卒業した私たち四十五期生の三十年前のこの日のことを思いおこさざるをえなかった。ある者は予科練・海兵・陸士に、ある者は軍需工場で終戦を迎えたのだった。

いよいよ同級会の当日、運動場では野球部の生徒たちが練習中だった。時は移り人は変っているけれど、三十年前そのままの校舎、校庭、校庭の桜の木ごしにみえる風越山に私は静かに興奮していた。

玄関では、小林平志君はじめ幹事の諸君が迎えてくださり、会場の教室にはいると、なつかしい顔々……。「やあ、お久しぶり」ようである。最後に、全員が肩をくんで校歌、応援歌の大合唱。「赤石山はぎぎとしてわが南信の骨をなし……」かつて私たちの青春讃歌であった校歌を、三十年の歳月を経て、いま同級の諸君とともに歌っているという感慨に、私は涙のあふれくるのをおさえることができなかった。

翌十七日は、勤勞奉仕でなつかしい遠山を有志で訪問することになっていたが(この計画は予定どおり実行された由)私は台風五号の四國來襲の報をうけて心を残しながら帰途につきざるをえなかった。

「ああ白雲の谷深く、都のちりも通ひて来ぬ伊那谷でともにすごした同級生諸君はいつまでたっても忘れられない。誰かが云っていた。「同級生とはこんないいものか」と。

盛大な同級会をお世話くださった幹事のみなさんほんとうに御苦勞さまでした。あの日の感慨を胸に、またいつの日にか同級生諸君に会えることを楽しみに、はるかな異郷で日にちを※

必要要素を有し日本も例外ではない。この裏返しで世界各国に大衆の不平不満が湧き上って来ている時代でもある。こうした時代こそ冷静に問題を分析し対応する自覚ある姿勢が私達に必要である。ある学者は日本の特色として次の六点を上げてゐる。島国であること、少数民族が圧倒的に少ないこと、階級貧富差が割合にないこと、階級流動性があつてゐるため縦の流動性がある事、個人の強い主張がなされなくその意味での個人主義がない事、天然資源がなく70%以上を輸入にたよつてゐる事、軍事力がないに等しい事。これらすべて戦後日本史の中でプラス作用して来ている事を忘れてはならない。島国であることは安全保障に利点あり、良港に恵まれ工場地帯となり船舶輸送コストは安い。能力均一化と資源のない事等も民族一丸となつての復興と発展を勝ち得た原因の一つといえよう。軍事力のないことも資金資源資材と能力をすべて軍関係に取られる事なく経済分野に集中し国際競争力増強が可能であった。こんなにも資源のない国に一億一千万の人間が生存し繁栄して来た驚くべき日本人の力を正しく把握え激動する世界史の転換期にあつて極端な悲観論楽観論を排し冷静に自信を持つて対処していかなければならぬ。99%輸入に頼る石油はどうか。世界に107億tが埋蔵されてゐるが、これは36年分しかない。深海底や砂漠の深い地下に千二百億tはあると推定されてゐるが発掘が可能となつたとしても70年分位しかなく、小麦7%大豆3%の自給しかない食糧はどうか。米をふくめた食糧自給は現在71%、これを昭和80年に75%にする計画があるが、あと25%はどうしても足りない。米加豪の穀物をソ中日は大量に買い付けてゐるが世界の多くの国が食糧難で苦しんでおり、穀物大国は食糧を政治的に利用する恐れは充分にあり、日本もまきこまれる恐れあり。10年前から地球は寒冷化しはじめており、20年先を頂点とし50年間位まで冷えた状態が続くという学者の説もある。事実とすれば

昭和50年度臨時總會記念講演

# 日本を

講師：日本鉄道

カナダ、北緯40度以北のソ連は大打撃を受ける。日本においては農業政策は重要であり、安定した専業農家の育成が急務だ。伊那谷通過も考えられる中央新幹線構想をはじめ全国新幹線計画が進行してゐるが、環境破壊公害問題も、石油・食糧問題とならんで世界的大問題でもある。しかし、歴史が示してゐるように人間の英知はいかに困難をも乗り越えて来てゐる。太陽エネルギーの実用化実現も時間の問題である。今日の大問題も人間の教育・技術・それを有効に利用する制度があれば解決は可能であると信ずる。日本の軍事力保有は徴兵制問題や軍事費増大など財政面からまず不可能だ。資源なし軍事力なしの日本は日米安保同盟を維持しソ中と等距離外交を展開しアジアの安定に努力すべきだと私は信ずる。軍備に注ぐ力を経済に投入し、軍事力なくとも経済力で日本は生き延びて行ける。経済大国に胡座をかいた外交不在は厳しく批判されなければならぬ。外交姿勢と国民一人一人の心の持ち方がここで問題となるのだ。島国根性の克服である。物言わず溶け込まずで誤解を受けてはならぬ。GNP三千数百億ドルの日本に比して、フィリピン・マレーシア合計二百五十億ドル以下、他の九国計でも日本の半分以下。日本経済の発展とその外交政策には、自国の当面の利益だけを考へて、他国を蹴落すような問題児的傾向はなくてはならない。石油をくれるインドネシアだけに50%の大経済援助をするというのではなく、アジアの諸国、とりわけ東南アジアの本当の実態をふまえて外交的、政治的問題を充分に考慮し正しい経済協力援助を進めるべきである。

以上述べてきたような戦後世界史の大転換期の中に生きる私達は、一人一人がより冷静に問題を分析し対応し、日本の正しい発展のために自覚ある生き方をすることである。その意味で私の話しを参考にしたいだけば幸いです。ありがとうございました。

(文責・中島)



## 遠山訪問記

中 45 回

卒業三十周年記念行事の一つとして吾々は思い出の遠山訪問を行なった。何故吾々四十五回卒業は遠山が特別の思い出の地となつたかは、中学一年の初めての行事が遠山で、帰途飯島においてガケ崩れに遭い大騒ぎとなつた古い思い出もさることながら、何よりも中学四年生の時約半年遠山川の木沢と飯島にダム発電所の建設のため動員され、土方生活に明け暮れた共同生活、いや飯島生活を行なったことによる。

ろいろのことがありすぎた。戦況もいよいよ息づまり、工事も突貫に突貫、又ここに働く人達は吾々を除き殆んどが韓国・朝鮮の人達だ。飯島においてはその他支那人も大勢加わり、今にして思えば国際色豊かな仕事場ではあつたが山谷の殺伐とした所に生活する以上いろいろのことが起らないわけはなく、皆それぞれ重苦しい思い出を背負つて終戦とともに社会の中に散つて行つたわけである。以後三十年、これら若き日のいやな思い出も謙虚に受けとめられる年令となりここに遠山訪問が実現することとなつた。

八月十七日朝七時三十分飯田駅よりバスで出発、雨の赤石林道を突走つた。出席者は十四名、峠を越えて遠山の谷間に下り、俗化しない昔のままの自然に接し、心の故郷とはかくあるかなと感激にひたるのも東の間木沢の小学校に到着、三十年前の我が帰るのも時間を要しなかつた。学校は体育館のみ新設されはしたが、教室は昔と変わらず、ここで誰がどうしたこうしたなどしばし思い出にふけり途中ダム・河原などを眺めながら和田に向つた。和田にて深尾君に迎えられ彼の案内で飯島に向かう。飯島はかつての面影はなく発電所と道路わきに一軒あるのみ、せめて発電所見学と期待してみたが「無人発電所につき立入禁止」の立札にて断念、しばし休憩するも発電機の低い回転音と放れ路の水の音のみが静かな谷間にこだましてゐるのであつた。昼食前に山崎(旧片町)君の養殖した川魚を御馳走していただけると云うことで雨の中を八重河内に向かう。深山の中の一軒屋彼が丹誠こめて育てた「ます」をほおばる。二時頃和田に戻り猪のすきやきにて交友をあたためる。遠山出身者深尾君の他山崎君・秦(旧鎌倉)君が合同、自然を見ながらのみかわす酒は又格別であつた。県外からの参加者もいっしょか田舎弁になじみ伊那谷の人となり談話すること約二時間、最後に校歌を斉唱し、お互いの健康と幸を祈りつつ四時半遠山を後にした。

願わくはいつまでもこの自然が破壊されないことを祈りつつ。(新井 清)

当日出席者

伊藤 孝人	木下 幹夫
熊谷 康登	小林 平志
知久(片桐) 健四郎	
中島 良人	林 裕
平沢 徹	丸山 哲郎
八坂 剛	吉川 四郎
吉沢 郁男	吉村 広
新井 清	

以上十四名の他遠山三名

※生きていきたいと思う。

# しあわせ 幸会の事

中 44 回  
林 利実

私達四十四回卒業生は、四を合わせるから「しあわせ会」という名になりました。

昭和二十年三月に卒業して以来三十年間毎年夏に同級会を開いて来ました。

昭和二十年代は、余り集まらなかったが最近は大体三十人前後集まる様になりました。

初めのうちは、学校へ行っていたり、又就職しても仲々暇を取れなかったと思えますが、もう五十才に近くなってきましたと、お互いの仕事の上でも、職場でも若干の余裕が出て来るのだと思えます。

又、最近の傾向として約三十人のうち二十人位は、毎年顔をみせるいわゆるレギュラーメンバーですが、十人位はしばらくぶり出て来る顔で、あちこちで、「やあ、しばらくぶりだなあ、十年ぶりか。」「いやあ二十年ぶりか。」等と、あちこちで肩をたたいたり、握手したりする光景がみられ、さすが同級会だなあという感を深くします。

年七月軍用機製造の勤勞奉仕隊として三菱重工名古屋航空機製作所に動員されました。そしてその年の十二月七日午後一時二十七分、突如襲った大地震の為、私達の働いていたレンガ工場が一瞬のうちに崩れ落ち同級生五人がその下敷きとなり遂に戦争の犠牲者としてあたら花の青春を散らしてしまいました。それから、十三年の後、五君の霊を慰さめる慰霊碑を建立しようと同級生一同相談がまとまり、母校々門横の旧奉安殿あとが、その場所としては最適であるとして学校当局と打合わせをしたところ、丁度母校創立五十周年事業を計画しているからその一環としたらどうかという話があり、それは又「渡りに舟」と早速記念事業の中へ入れて頂き、時の在校生某君をモデルとして、先輩倉沢興世先生の作による「希望の像」が完成し、遺族・恩師多数を招いて盛大な除幕式が出来た事は、今も忘れ得ぬ感激です。

そして又、幾星霜が流れ、来年は三十三回忌に当りますので今年の総会にはかり

来年は名古屋で同級会を開き、みんなで当時を偲びながら五君の冥福を祈ろうではないかと言う事が決まり在名同級生がその準備に当る事になりました。

## 燦々会前厄払い祈願旅行

高6回 牧内振作

で起居を共にし飢えと戦いながら、空襲の弾雨にさらされその日の命も約束されない日々を過した中学時代であったが、今なお兄弟の様な関係にあり、それぞれ分野で活躍して



希望の像

ちが集まって、喜びも悲しみも共に分か合う仲間となり、その美しい友情を知る人から、うらやましがられていきます。

昭和二十二年の先頭に立つ、私たち高六同級生も齢を重ねること四十年、論語にいう「四十而不惑」の年を迎えました。この年令は、それぞれ進んだ道は異なっても、社会の一翼をにない、また一家の柱として自他ともに認め合える人生の盛りを迎えている時でもあります。

泊二日の日程で行なわれまして。参加者人数の決定がむずかしく、出発前日まで、幹事さんの苦勞は大変なものだったようです。でも集団としてのまとまりには、丁度手ごろな十一名が参加しました。

二日目は、前日の忙しい日程にこりて、ゆとりのある参拝にしようとして、衆議一決、目ざすは、彦根の多賀大社。



人生の盛りと曲り角を迎え、一節区切りを入れて、心新たに日々への精進を思う時、こうして、お互いに異なった道を歩いていても、どんなに時をへだてていても、顔を合わせた瞬間に学生時代のその日のまま、いやむしろ年輪を重ね深

# 続 秋の箱根で同級会

中 27 回  
宮 沢 忠 男

(前号につづいて)

やがて西江・吉沢・佐々木の飯田組もお着きである。夫人同伴の佐々木は気が引けると見えて、近くのホテルに室をとり、奥さん連れられてこい、との皆のすすめにも、紅一点の夫人は顔を見せなかった。愚老共の酒の肴にされたのはたまたまないから無理もない話だ。

盛り上がる。ステージで芸者衆の「箱根音頭」の歌と踊りが披露され続いて有志の「伊那節」・「竜峡小唄」などの余興が飛び出し、宴はいよいよ佳境に入る。一座を見渡すところ、禿頭、白髪の初老の諸公の顔ぶれ。時に「孫は可愛いものだ」などと人並のことを云う年頃。一杯気嫌で威勢はいいが、人生の花の季節は過ぎて齢六十余才、いずこを見てもさえない顔ぶれの感一しおである。

下戸組はぼつぼつ部屋に消え、一風呂浴びて、早川の瀬音を枕辺に聞き、心地よい山の湯の床に入る。吞兵衛組は飲み連れ同士、一部屋に合流、十二時頃まで飲み上げたらしい。

動とする。ところで飯田市大宮温泉会場の数年前、十年後には「ハワイで又逢おう。達者で貯金をしておこう」と約したことがあったが、異状だった高度成長の日本列島も、不景気風の身にしみる今日この頃。それにカラ元気は出しても、更年期なのか、高血圧だ。神経痛だ、と成人病も出て、足腰の弱い老境ともなれば、何人参加出来ることやら。ハワイ行きのお流れの公算も大きいというもの。ともあれお互いに達者で長生きをして楽しい同級会に一度でも多く顔を出したいのが念願。

土産物店が軒を連ね、急坂を上った正面が大噴水の見える強羅の目玉商品「箱根強羅公園」である。「入場料三百円は高いね」の余り興味もない声も出る。酒の方なら二千円や三千円は惜しくない連中のくせに不思議である。大噴水を中心に、熱帯鳥類館・高山動物園・自然博物館など入園してみることはなかなか見応えのある珍しい内容の高山公園だった。

「三百円の値打ちは充分あるよ」と駆け足で一巡、新宿連絡の電車に飛び乗りで間に合い、湯元へ下山。小田急のロマンスカーに乗車、新宿まで一時間半だ。如才なく幹事から月桂冠のカップ入りとおつまみが配給される。昼どきである。食堂車へカツサンドなど思い思いの昼食を注文、孫の好物の釜めしを土産に買う者もある。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。次回の上諏訪温泉あたりで、出会いとするがこと万年当番の近松名幹事が心得たもの。「来年の又逢う日まで達者で暮らせよ」とホームで解散する。近松君は三時の特急で帰る。西江君は京王線の烏山に住む長女を訪ねるといふ。私も姉が烏山病院生活などで久しぶりに見舞うことにし、西江君と同行。

不景気な話はよそう。やがておさまりの校歌、赤石山、「こんしんとう」の応援歌の斉唱で、中学坊主の童心にかえって、宴席は最高潮となり、第一会場は漸くお開き。第二次会場の宿のバーに舞台は移る。

オンザロック・ストレートで飲み直した。吞兵衛は酒にはうるさい。余り酒は女中さんが気をきかせて回してくる。ところで会費は宴会付の一泊一万円だ。東京組幹事の心づくしが想像される。

立った箱根の山合いの朝は気分快適であった。朝風呂をすませて、七時半ごろ昨夜の広間で朝食。食膳には結構な量の生一本がちゃんど付く。朝酒の味は正に甘露。もう一本と追加して要求する豪の者もある。

八時すぎ宿の玄関前で、記念撮影のあと、次回の又逢う日まで……と再回を約して、現地解散、自由行動とする。

八時すぎ宿の玄関前で、記念撮影のあと、次回の又逢う日まで……と再回を約して、現地解散、自由行動とする。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

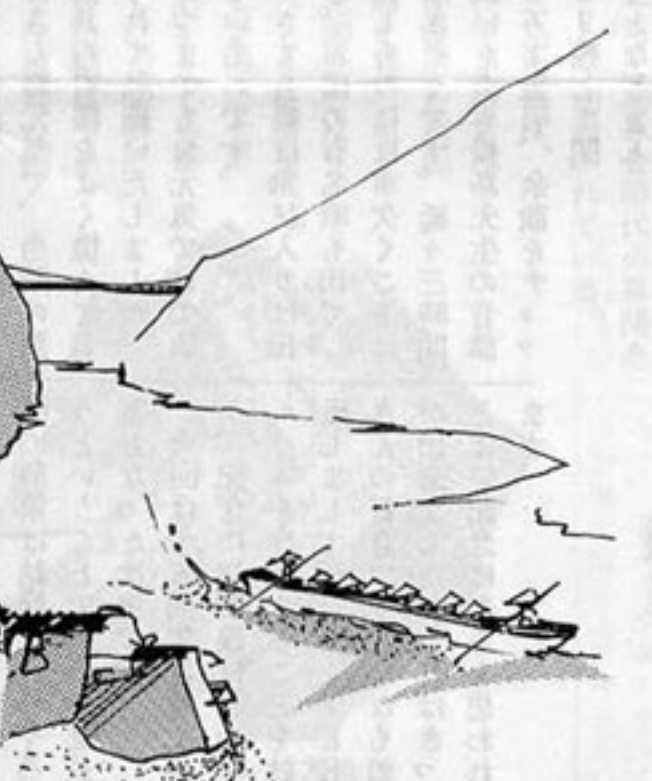
「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。

「おばあ、大将、太郎」など通りのよいあだ名で呼び合い、初老の面々ながら、中学坊主の童心にかえって楽しい話題はつきない。



# 卒業15周年記念同期会

永井哲夫 (高12回)

飯田高校昭和35年卒十五周年記念同期会は此の夏、八月十五日母校の新校舎同窓会館で九名の恩師の御出席を得て、全国の百余名の同窓生と十五年ぶりの交歓で盛会でした。

もの足りない連中のために翌日エクスカージョンとして飯田高原散策とゴルフコンペを行ないまして、夫々愉快な一日を過ごすことができました。

この幹事会で最初に困ったことは会員の現住所が全くつかめていないということでした。何よりも先ず名簿を作製しなければなりません。結局、市役所勤務の矢沢与平君に一任することになりましたが、驚くなかつた。

「これならいける」御好意に感謝しながらの帰途、我々はもう会の成功を確信したものです。これ又幸運というべきでありましょう。諸事初めよければ後もよし。連絡用印刷物は秀文社の北林君。会場の設営及宴会の段取りはその方面でめっぽう顔のきく壺戸宮沢製菓の宮沢君に担当してもらった。

「長城城頭空高く……」在校当時我々はこの歌を何度唄ったことだろうか。各テーブルでは先生方を囲んで爆笑と拍手で大騒ぎ。申し遅れましたがここで当日参加の先生方のことを少々。退職されたが当時体育の松島先生。野球の木村先生。現在も活躍されている数研の小林先生。社会科の保科先生。英研の高野先生。生物の中田先生。物理の牛山先生。体育の北村先生。社研の小管先生。以上

九名の御参加をいただき、皆さんお元気で、当時の悪童共の有様をよく憶えておられて恐縮いたしました。いつまでもお元気でいて欲しいものです。さて会場は飛び入りは出る。お国の有名唄も出て、出しものには事欠くことはなさそうです。延々三時間続いた会も松島先生の音頭で万才三唱、余韻をチョップリ残して閉会となりました。共に肩をたたきながら再会を約して帰途につくも、まだ帰れそうにない者等さまざまに一応成功裡に終結することができました。

行なわれまし、飯田高原の散策は結局又一杯やろうということ昨日の延長戦となった次第です。今回は十五周年記念であり、記念に住所録付きのアルバムを作成することを計画しまして、フォートKKさんの好意でりっぱなものが出来ました。これはきつとよい記念になると思われます。

この会は名称のとおり、飯田高校を昭和35年に卒業した高卒12回の同窓の集りであり、卒業以来各地区においては、それぞれ同窓会なるものは行なわれておりましたが、全国に散在している仲間が一堂に会して交歓したことは未だ一度もなく、たまたま本年は卒業以来十五周年に当ることでもあり、是非やろうということになり、比較的出席し易いお盆に期日を決めました。又一日の同期会では

伊に在住する、いわば、こいううこと好きな者共が請負うことになり、事務局を中島洋一君経営の大橋旅館に定めて通算八回の幹事を重ねながら、半ば楽しんでみながら準備を進めてまいりました。実際のところ、この準備も、脱線に脱線の連続で、当時の悪童共の集りになって、ともすれば本題はそつちのけで、昔話に花を咲かせてしまい、参集する若き丈夫も昔そのまま意気軒昂でした。

次の問題は会場でした。とりあえず参加人員を百名から百二十名と推定して、その収容能力のある会場を捜すことにしました。時はお盆であり、なかなか思う場所がなく困却してしまい母校を貸していただけない

ものであつた。さて当日になって、胸に付けた名前と顔とが全く合わないのは驚きでした。十五年といえはその昔とい

て他には存在しないのであり、年に一度在校当時の若さに返って当時の学校の裏面史などを語り、校歌を高唱する風景はほほえましいものであつた。

竹松利登(高7)、土屋勝三(高8)、古田孝文(高8)の諸氏であり、原田氏のところへ事務局をおくこととなった。今後は上伊那の東部や北部に在任する会員に呼びかけて発展を期するという勢である。

時より川路温泉において開催された。集まる者二十余名、やはり旧中学卒のオールドボーイが過半を占めるが、一杯入ると昔の中学生を再現してくれて、理想主義に徹した当時からやましくさえ思えた。

## 同窓会支部便り

### 松川支部

九月七日(日)松川町福祉センターで総会が催された。

支部規約の制定や地区役員などの組織が整い、長い歴史を持ち、百名以上の在郷会員を擁する大世帯にふさわしい体制作りと敬意を表する。しかし、梨の出荷

期をひかえて出席者が二十名前後と幹部の方々はなげいておられたが、八十一才の大先輩から二十才台までの年齢差のある者が一堂に会する会は、同窓会をおい

### 伊那市支部

伊那市を中心とした支部の結成は前々から考えられ

熊谷記) 副会長、宮脇博人氏(中26) 会計、牧内寛末氏(中34)、幹事七名は、片桐茂(中39) 近藤廉治(中44)、原田鎌(中45)、城崎輝美(高6)

### 下条支部

九月十八日(土)午後四



### 駒ヶ根支部

駒ヶ根赤石会は従来市内の在住者同窓会として年一回乃至二回を原則として開催されてきました。しかし、今年度より地域を広く会員により多くの交流をはかるため会を発展解消し、「上伊那南部赤石会」として発足した。

第一回総会は去る七月二十五日午後六時三十分、中央アルプスの山麓駒ヶ根市において開催された。当日は来賓として本部より中島会長、学校側より神戸教頭の参席を得て四十数名の会員が出席した。会の運営は以前からこの会

## クラブ活動紹介

下半期における運動部の活躍の中で、庭球部は輝やかなしい成果を上げています。久々に団体県制覇を勝ち取り全国大会三回戦に進出。各種大会、新人戦県大会でも上位を独占。来年度連続全国大会出場が期待されています。陸上の二年生高野は北信越五県大会、秋季南信大会準決で岡南に

また新潟県東区京大伝でも区間三位の好走三重国体での健斗が期待されています。バスケットは飯伊優勝の勢いで県大会に出場。活躍が期待される。サッカーも若手石田監督の下ままとあって、伝統のラグビーは本番の花園をめざし、国体ラグビー開催地として地域のラグビー熱の高揚を背景に猛練習に入っている。野球は部員九名で新チーム出発。秋季南信大会準決で岡南に



▲只今練習中(合唱班)

り期待されている。卓球・男女弓道は依然として県下で屈指の成績をあげている。女子は施設等条件的に不利ではあるが、悪条件を乗り越え弓道の春南信団体優勝、新人戦で県ベスト8進出を始め、バレー・陸上・卓球・剣道・水泳・山岳と少数ながら精鋭で一定の成果を収めている。女子マネージャーも増えている。同好会では相撲が新人戦県団体二位

個人二位と気を吐き、空手にも人気が出ている。伝統のある学芸部各研究会も地道な活動が展開されており、各研究会の機関誌も定期的な発行されており、郷土研究会、考古学研究会の研究誌は、関係方面から特に注目され話題を呼び評価されている。また漫画研

究会の「芸画党」は全国にもまれな高校生漫画の活版印刷誌として人気がある。合唱部は、朝日コンクールで優勝し金沢での中部大会出場権を得て合唱部史の中で第三期黄金時代の幕開きとして期待されている。また将棋は、三年連続県団体優勝の新記録を勝ち取り全国大会はベスト8に進出し全国にその名をとどろかした。学芸部の活動については誌面の関係もあり別の



▲校友会誌

について種々御尽力いただいていて早田和夫氏の司会によりなごやかなうちに進められ、会長一名、幹事四名が選出された。

会長 北原名田造(中11)  
幹事 早田 和夫(中40)  
坂井 武司(中47)  
松村 大八(高1)  
小野 雄司(高2)

続いて懇親会に入り、自己紹介の後、旧知新顔それぞれ手を取り合い肩をたたきつつ語り合い、校歌・応援歌を斉唱し、活力ある雰囲気は、先輩後輩ともども同窓というでかい輪の中に融合して、何時果てるとも知れず、宴はますます高揚し、母校の健全なる発展と

会員の健康を祈念して万才三唱、次回の元氣な再会を誓い合って散会した。高潮した面々は夕闇に包まれた駒ヶ根の灯にそれぞれ思い出の影を残して三々五々帰路についた。

附記  
会長・北原名田造氏は、日中友好協会南信地区本部開拓者部会上伊那支部長として農業研修のため中国を訪問する。(小野雄司記)

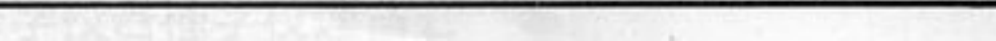
だかのうち、最も由緒ある院だとか。加賀百万石の前田利家公の夫人が建立したものといい、禅院式の枯山水の庭園一名桔梗の庭が有名であるし、近衛家などの皇族の霊牌を祀ってあるという呑湖閣は金閣などと共に見られているし、飯田の中島君男氏からは都合で行けないという電報が届いている。元支部長の故松村正澄氏(中17)は既に去って三年余になるが、未亡人が毎日出席され顔なじみになっているというのも此処の特色である。

だから、一度で十年の知己のようになり、気楽に話せるし、特に会長の代田稔氏(中17)は「何でも聞い

てくれる」という温顔の人格者であるからこそとうなづかれる。

閉会後特に許されて拝観した大徳寺本院の由緒ある山門とか襖絵もさることながら、簾目の美しい石庭の向うに大文字を望んでいると、都会の騒音もなく静かさの中に引き込まれて行く思いであった。

(熊谷記)



# 寄贈品紹介

高校第七回生奥村晃作氏（飯田市東和町出身）より氏の評論集「隠遁歌人の源流」（東京笠間書院四月刊）を寄贈された。氏は歌誌「コスモス」及び「騎」に拠って活躍しておられる。先頃合同歌集「伊那」の出版記念会に講演のため帰省。高校第二回生武田太郎氏（実名小林秀雄飯田市長姫町一ノ四四）は「幻想の伊那谷」を東京、新人物往来社より四月刊行。一部を恵贈された。信濃宮宗良親王についての考察は庄巻である。現在角川書店発行の雑誌「短歌」に連載の評論は郷土の歴史的風土性を掘り上げて好評噴々。

中四十四回近藤藤治氏は医療の谷間のひとつと言われる精神科の新しい治療の試み、病院作りの努力のあとを「解放病棟」という記

録にまとめられ、この程同窓会に寄贈された。また同窓諸氏と共同執筆の新著「信州を考える」（高十回長沼石根氏編）と雑誌「暮しと健康」をあわせ贈ってこられた。

高十二回卒業十五周年記念アルバム一冊、人間とは想像を越えた成長を遂げるものであることを実証する貴重な資料を送って下さる。ふるい同窓生に懐かしい旧飯田中学の制服（黒練りぼたん、ダルマ型、ズボンポケットなし）が夏冬各一着、本町原喜好氏（中二十一回）から資料室に寄贈された。制服自由化の今日、当時の誇り高き中学生の英姿を髣髴させ、感慨無量なるものがある。

中二十五回卒業五十周年記念樹として「まゆみ」を中四十五回卒業三十周年記



▲旧制中学制服  
（左・夏服表 右・冬服裏）

念樹として「泰山木・金木」をそれぞれ校内に植え、て頂く。



- ・「高12回卒業15周年記念アルバム」
- ・「幻想の伊那谷」武田太郎（高2）より
- ・「隠遁歌人の源流」奥村晃作（高2）より

## 事務局

### だより

#### 一、会員名簿の発行について

大変お待たせしましたが十一月中旬頃から発送出来るかと存じます。これについて反省やらお願いを申し上げます。

(1) 昨年十月会員各位から原票をいただいたいて、それを整理するという計画で、七月発行出来るかと予報したものであるが、この計画は甘過ぎたことを反省しております。三月末になっても提出三割以下という時点で、適切な手段を打つことも出来なかつた事務局の手不足も反省させられるけれども、各回に特に名簿作成に關す

る連絡網でも作っておけばよかつたと痛感された。

(2) 維持会費と荷造送料の計三千円納入者に無償配布するというのが、案外徹底していなかった為に、一月末に三千枚、九月に千六百枚のヘガキを出して、名簿希望の有無と不足額を申し上げた。これは発行部数の把握に必要であつたから希望されていると思われの方々を選んでのものである。結局、八百余名が不明のままに、契約通り五千二百部の発行としましたので、目下約八百部が残ることになつております。希望者は至急不足額をお送り下さい。

(3) 無償配布については、

種々ご意見があるかと思ひます。狂乱と言われた物価高騰の中だっただけに、五百円の追徴のほかに、広告欄を設けて多額の援助をお願いし、おかげで無償の名目が立って発行にこぎつた。又その間、広告の取材に当られた方々の炎天下での御苦労など、思えば多く人々の善意と努力を倍加させたことになりす。それはそれなりに意義のあることではあるが、今後は如何かと思われ。

名簿の無償は好ましいことであり、今回程のインフレでない限り、維持会費の見返りとして可能である筈です。但し、会員の半数以上が維持会費を完納することが根本条件であります。

(4) 名簿の末尾に附したヘガキは、転居や不明者の連絡用に利用して下さい。

#### 二、維持会費について

(1) 本年度から千円になったことは前回にも申しましたが、未納の方は何分お願ひします。（今回は納入明細表は差し上げられませんが）

(2) 四十九年度迄の未納分については、各回役員の方々に一覧表をお届けして、納入方をお願ひするよう命ぜられておりますが、事務局の手不足のため、今後順次お願ひ致しますのでよろしく。

(3) 納入の際は、卒業回数

#### 編集後記

同窓会報十号をお届けします。会の運営の推進力である各回同窓会の活動が活発になっていて「便り」欄が増ページになりました。御同慶にたえません。

校地整備事業は順調に進み、新校庭が高松原遺跡として本校考古学班により紹介されているため、飯田女子短大教授大沢和夫先生を中心に、近く発掘調査団をつくり、調査が始められる模様です。

十月も押しつまつた二十五日、風越山の頂上から虚空蔵あたりまで紅葉が降りて来ております。校庭では往年の名選手たちが集まり、野球部先輩の慰霊祭が行われており、講堂では高校入学者総合選抜の研究会が始まっています。独立開校七十五周年を数える母校の内外にも予測もつかない風が寄せて来る時代のような気がして、高森の台地の上を中央道が白く走っています。この西

すがとなる資料など心がけて保存しておいて下さい。一例ですが、尚志社の資料については既に整理され資料室に保管されてありますが、その他の自治団体や郷友会などについても、その歴史を語る資料をまとめておいて提供していただきたいと思ひますので、関係の方々の御高配を賜わりたいものであります。

の宮線が開通して七十日ばかり、俄かに関西方面が近くなりなりました。紅葉の季節にはいったのに、道路の混雑は沈静してきて、公団では赤字化を心配し始めています。せつかくできな道を郷土の発展に利用する計画はひどく遅れているようです。（同窓諸兄の御骨折りを切にねがいます。）

関西方面からの帰りに利用していただくだけでなく、今年の総会は母校の高松祭と日を同じにして開き、新風を盛り込むべく実行委員会が発足して奮闘されたにもかかわらず、若い層の出席は少いようです。「ボクには関係ないよ」が口癖のエビかカニのような甲羅をつけた若い方たちのことを「ほんとに白けた世代だ」など慨いている中堅世代の実行委員の方々、あきらめたらそれまでです。声援を送っている若者も多勢いるのです。

